

四国八十八カ所ヘンロ小屋プロジェクト

住民有志のボランティアによるヘンロ小屋づくりを通じた
四国遍路文化の継承と人々のふれ合い

KS
DP 関西大学
戦略的研究基盤
団地再編
リーフレット
Re-DANCHI leaflet-

MARCH 2014
VOL. 145

文部科学省 私立大学 戦略的研究基盤形成支援事業
『集合住宅“団地”の再編（再生・更新）手法に関する技術開発研究』



八十八カ所のヘンロ小屋の提案模型



地元有志の方々によるボランティアでの建設



ヘンロ小屋1号の内部



子ども達もヘンロ小屋制作に参加。遍路文化に触れる。

■四国八十八ヶ所ヘンロ小屋プロジェクト

四国には八十八カ所の霊場札所を巡拝する遍路道がある。空海が開いたとされ、1200年もの歴史があり、これを巡礼するお遍路さんや地元の人たちによって今に受け継がれている。四国遍路文化には3つ特徴がある。4県を環状に何度も回ることができる「循環性」、そして地元住民による「お接待」、空海とともに歩く「同行二人」という考え方だ。仕事で海外を訪れるうち、これらが祈りを体現したシステムとして世界でも類を見ない貴重なものであると気づいた。

この四国遍路道 1400km の道中 88 カ所に、お遍

路さんが休憩、仮眠するための「ヘンロ小屋」をボランティアで作っていくのが四国八十八ヶ所ヘンロ小屋プロジェクトである。2001年から始めて49棟完成している。（2014年2月現在）プロジェクトは遍路文化の継承と広がりを目指している。地域の様々な人たちとともにつくる過程も大切にしながら作っている。ヘンロ小屋は地元有志のボランティアの力によって造られる。小屋はあくまできっかけであり、住民同士のふれ合いやお遍路さんという文化を広げるためのツールなのだ。小屋を通して「祈り」「人と人、人と自然のふれあいや支え合い」の精神が広がり、深まることを願っている。

■お遍路さんの原風景

プロジェクトを思い立ったのは、幼い頃から家で、歩き遍路の人たちをもてなしていた原風景が自分の中に残っているからだ。18歳まで過ごした故郷の徳島県海陽町では、お遍路さんが家に来ることもあり、お接待は日常の風景だった。両親のまねをしてお米をさしあげると、両手を合わせて祈ってくれたお遍路さんたちの姿を覚えている。大阪に出て大学で建築を学び、今は南船場で建築設計事務所を経営、近畿大学で教授を務めている。40歳前後から日常の祈りの場に関心を抱き、約30カ国の巡礼地を巡った。その過程で、改めて四国巡礼の素晴らしさに気づいた。何よりきわめてユニークだ。四国遍路文化には3つ特徴がある。まず「循環性」である。海外の巡礼は聖地を目指す一方通行のものが多く、四国巡礼は全長約1400kmを循環する。4県を環状に何度も回ることができるのである。そして「お接待」という地元住民によるお遍路さんへのお茶を出したり、宿を貸したりといったおもてなしが挙げられる。そしてお遍路文化を開いたとされる空海とともに歩く「同行二人」という考え方だ。これらは世界でも類を見ない貴重なものである。近年、団体のバス遍路、週末遍路、バイク遍路など多様な形のお遍路さんが生まれている。その一方で、単独行の歩き遍路の苦勞を耳にした。無料の遍路宿が少なくなった。お遍路さんが民家や寺の軒下で休んだり、寝たりするのを嫌がる風潮も強まったと聞いた。なんだか世知辛い話である。せめて雨露のしのげる小屋をつくろうと思い立ったのが、50歳のときだ。

■四国八十八ヶ所へんろ小屋プロジェクト

遍路道は約1400kmの道のりである。その道中89カ所に、お遍路さんが休憩・仮眠するための「へん

ろ小屋」をボランティアで作っているのが四国八十八ヶ所へんろ小屋プロジェクトである。2001年にプロジェクトを始めた。遍路小屋ではなくへんろ小屋という。前向きで明るい感じがするからだ。4~5kmごとの道沿いに造り、それぞれ3~10坪の大きさである。札所に合わせた88カ所に集大成となる1カ所を加え、89棟を造る。現在48棟ができている。プロジェクトを始める前に4年ほどかけて遍路道を車で時には徒歩で何度もまわった。その調査で見つけた空き地を敷地と仮定し、88カ所文の模型を制作し、四国中の美術館で展覧会を行い地元の人たちにプロジェクトを伝えることにした。結果的にへんろ小屋第一号はそ

の展覧会を見に来た方が協力してくだるようになった。

■造る過程を大切に

プロジェクトでは造る過程を非常に大切にしている。へんろ小屋づくりを地元有志がボランティアで行うという点が大切である。こどもから年長者まで一緒になって、できるだけ大勢で造ることが理想としており、直接的にも間接的にも簡単に参加できるということが重要である。造る作業ばかりが参加ではない。釘1本でも打ってくれば参加である。浄財を集めてくださる方、広報活動をしてくれる方、おにぎりを差し入れてくれる方も参加者なのだと考えていて、そういった意味で参加

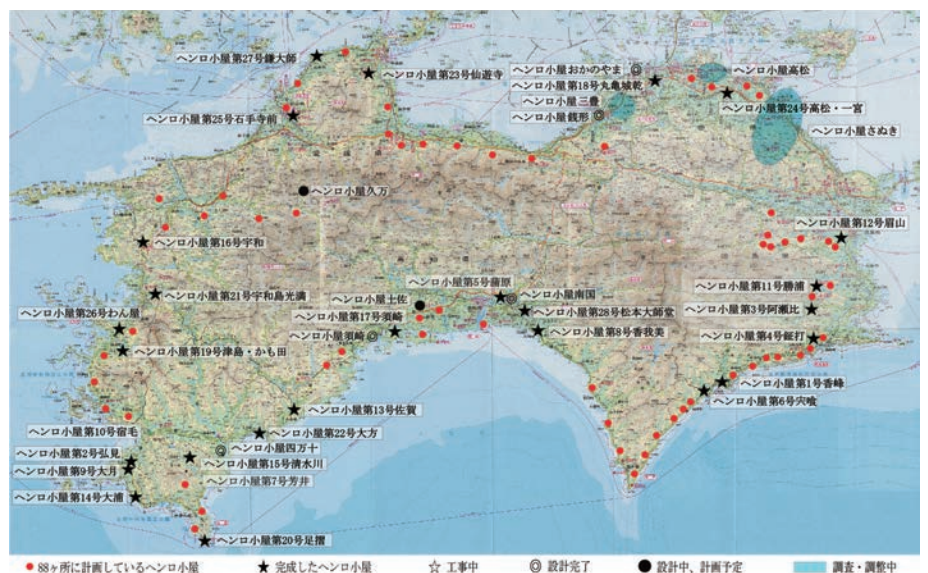


図1. 展覧会時の計画地と完成したへんろ小屋の位置関係。



図2. 地元の人が協働でつくる。

者が1000人を超えたヘンロ小屋もある。その過程の中で、地域の人たちの触れ合いが生まれ、遍路文化に触れることにつながるのである。地元の人に集まってもらい、話し合いをしながら共に造っていく過程をなによりも大切なのだ。

■それぞれのヘンロ小屋の特徴

場所によって形や作り方、費用はすべて異なる。それは個人の浄財が集まる場合や建材を寄付してくれる場合、自治体や地元企業が協力してくれる場合など環境がさまざまだからだ。地域の状況に合わせてつくる事が大切なのである。周辺の自然や景観に配慮するのはもちろん、地域固有の文化や産業、物産などを小屋の形や内装に反映させた設計を心がけている。地域性を大事にし、物語性を持たせると、造る人も使う人も楽しくなる。小屋自体は手段でしかない。お遍路さん同士や地域の人たちが触れ合い、元気になってもらうことが目的なのだ。

第一号「香峰」は故郷である海陽町の阿波海南駅前に造った。40回あまり霊場をまわり、「お接待がいきがい」だと語る地元の方が、所有する土地と工事費を提供してくれた。格子にした木材62本は、空海の生きた年数を示す。簡単な台所やトイレを設けた。

29号「多度津・おかのやま」は、香川県多度津町に設置。弥生式土器の出土地であるため、弥生時代の住居を基にデザインした。地元の幼稚園児や小学生らが描いた絵をタイルにして貼ったり、手形を壁に付けたりと言った取り組みを行い、ヘンロ小屋づくりに子ども達にも参加してもらった。幼いときに関わった思い出が、遍路文化に対する理解の助けになればと考えている。

最も新しいのは、6月に阿南市新野町に完成した47号「大根」。五重塔をイメージしており、高さ8.5メートル。一本一本の角材を人に見

立てており、支え合う意味をもたせた。また自然災害や人災などが多く起こる現代において、人の心の安寧をもたらしたいとの気持ちも込めている。

活動が続けるうちに、有志がプロジェクトを支援する「四国八十八ヶ所ヘンロ小屋プロジェクトを支える会」をつくってくれ、4県の知事を顧問に迎えた。こういった社会の反響に自分自身驚いている。また小屋造りに協力していただいた方や、小屋を利用したあるきお遍路さんから、たくさんの感謝の言葉を頂いていることも印象深い。

■10年のヘンロ小屋づくりから

プロジェクトはすべて地元の方によって進められるので、地元の方に意欲を持ってもらうことが大切だ。まずは中心人物を見つけて協力を仰ぎ、地元の方にプロジェクトを説明してやる気を持ってもらう。きっかけは自分から発信しているが、活動が続けていくうちに自然とまわりの人たちが積極的に取り組み小屋づくりが進んでいくことはとてもおもしろい。また、ヘンロ小屋はお遍路さんのためのものであるため、利害関係がなく、誰もが気持ちよく取り組むことができている点も重要である。ヘンロ小屋ができるだけでは意味がない。お遍路さんたちと地元の方にコミュニケーションをとってもらうことが大切なのだ。



図7. 第47号「大根」。



図3. 第1号「香峰」。



図4. 「香峰」内部の様子。



図5. 第29号「多度津・おかのやま」。



図6. 子ども達のタイル。



図8. 「大根」内部。支え合いの象徴。

■プロジェクトの意味

このプロジェクトの真意はお遍路さんのために小屋を造ることではない。小屋はあくまで手段であり、ヘンロ小屋を通じて地元住民が触れ合い、遍路文化が再考されることが重要なのである。大企業の資金に頼らず、自治体やお寺の援助も受けずにやろうと決めて自主性に任せてヘンロ小屋づくりを進めている。四国の人たちは温かかった。本当にたくさんの方が参加してくれて、人とひとの出会いの場ともなっている。地元の企業や信用金庫、地方紙、自治体などサポートの輪が広がり、自分自身も驚いている。ヘンロ小屋に置かれるノートにはたくさんの感謝の言葉が書かれている。それは自分自身はもちろん地元の方にも勇気を与えている。人の喜びが自分の幸せに、支えることが支えられることにつながるのだ。遍路文化は形ではなく心でつながれていく。世界的に見ても、日本人は優しさやもてなしの心を強くもっている。中でも、遍路文化のある四国の人々は親切で、お接待の心がある。遍路文化は世界に誇れる世界唯一の文化。その一端を、地域の方々と一緒につくっていききたい。

■みんなで取り組むこと

ヘンロ小屋づくりは多くの人を巻き込みながら行われる。きっかけがあれば自然と行動はつながり広がっていくのだ。団地再編においても協働することが必要となってくる。今の団地では住民同士の関わり合いは少ない。高齢化が進み空き家は増え、かつてあった活力は失われている。団地再編には、様々な世代

が関わり合うきっかけづくりとある目標に対してみんなで一緒に取り組むことが必要なのだ。それが地域の人をつなげ、活動を生み、すこしずつ地域の活力へとつながっていくのである。このヘンロ小屋プロジェクトは、世代を超えて様々な人が関わり合うその関係性の中に団地再編の可能性を示している。



図 10. 世代を超えた交流が生まれる。



図 9. ヘンロ小屋は地域の特徴ともなる。



図 11. 完成後住民が花を植えた。



図 12. お遍路さんと地元住民の交流。ヘンロ小屋が遍路文化をつないでいく。

『四国八十八カ所ヘンロ小屋プロジェクト

住民有志のボランティアによるヘンロ小屋づくりを通した
四国遍路文化の継承と人々のふれ合い』

レクチャー：歌 一洋（近畿大学 教授）

記録・作成：関谷 大志朗（関西大学大学院 博士前期課程）

宮崎 篤徳（関西大学 先端科学技術推進機構）

（講演：2013年11月18日）

本リーフレットは、文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業
「集合住宅「団地」の再編（再生・更新）手法に関する技術開発研究
（平成23年度～平成27年度）」によって作成された。

発行：2014年3月

関西大学

先端科学技術推進機構 地域再生センター

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3丁目3番35号

先端科学技術推進機構 4F 団地再編プロジェクト室

Tel : 06-6368-1111（内線：6720）

URL : <http://ksdp.jimdo.com/>